

『てには網引綱』と『てにをはの辨』

井 上 誠 之 助

一 序

明治三二年、保科孝一著「国語学小史」の刊行以来、専門家の續くに堪へるものから、嘗つての文檢受験用また教科書用の所謂ノリとハサミ式のものまでを含めて、国語学史と題し、あるいはそれに類する単行本は、今日までに三十を越えたが、(ただし同一人の著述でも改訂増削の類は別に数へる)、これら教多くの著書において梅井道敏著『てには網引綱』に言及しないものはほとんどなく、逆に幻交庵の『てにをはの辨』に就いては福井久蔵の著述以外に触れたものはない(明治四〇年刊「日本文法史」・昭和九年刊「訂増日本文法史」・同一七年刊「国語学史」の三書)。ただしそれは文字通り触れたのであつて「氏(注―道敏を指す)の教へを受けし幻交庵の主人は文化十三年に亨爾遠波の辨二巻を著せり。」(「日本文法史」)とあるだけで、その内容には及ばない。(後の二著も略々同文ながら「国語学史」では年時を記さない。)これに対し『てには網引綱』に就いては諸書ほとんどすべて多かれ少なかれこれを説く。しかしながらその多くは

『てには網引綱』と『てにをはの辨』

(1) 手爾葉の名義は平古止点より出でたとし、「春樹顯秘抄」などに見える出葉説、あるいは「つつ留」・「哉留」に関する秘説伝授を烈しく排撃したこと

(2) 「手爾葉大概抄」を定家の作に非ずと断じたこと

(3) 「ただ」・「なほ」・「いとど」は手爾葉ではなく詞であり、これを混雜した「春樹顯秘抄」などを「かゝる杜撰なる書を秘伝などいふ事、かたはらいたき事也」(下19才。尚、序文にも同趣旨の事あり)と極力難じたこと

(4) 手爾葉を今日の普通の文法論に言ふ助詞と助動詞とに分けたこと

など、その批判的言辞ならびにその批判的態度から生れた二三の指摘を高く評価するにとどまり、その所説を全般にわたつて論じたのは山田孝雄「国語学史」昭和一八年刊・田辺正男「国語学史」同三四年刊)ぐらゐであらう。尚、他に保科孝一(前記の書)・青木伶子(「国語国文学研究史大成」15巻「国語学」昭和三六年刊)・古田東朔(築島裕と共著「国語学史」同四七年刊)等も多少論ずるところがある。

二 てには綱引綱

二ノ一 上下の二巻二冊。明和七年（一七七〇）九月刊。その序に年時を記さず、またその成立年時を知るべき文辭は「てには綱引綱」には見えないが、これに次ぐ「蜘蛛のすがき」の安永九年（一七八〇）八月の自序に「此の十とせあまり過ぎにし秋、てにをはの大綱をあげて綱引綱二巻をしるせしは……」とあるから、最も遅れて成ると見た場合、明和七年の七月頃といふことになるが、「十とせあまり過ぎにし秋」を文字通りに信するなら、今少し早い年の成立と見ることにならうか。

二ノ二 權威により伝授され妄りに他見を許さない秘伝書・所謂「姉小路式」の一群「歌道秘蔵録」が始めて寛文一三年（一六七三）に板になり、次いで「和歌八重垣」が元禄一三年（一七〇〇）を初印として累次の刊行、また「和歌てには秘伝抄」が宝永二年（一七〇五）に板行を見るなど、伝授の權威を破り秘伝公開・秘説批判の機運が徐々に動き、傍ら仮名遣研究における契沖の実証的・帰納的方法が広まらうとする時に「てには綱引綱」は生れた。その批判的言辭および新たな諸指摘は、手爾葉研究史上、画期的なことではあった。しかしこれらのことは実は本文を読まなくても、目次ならびに巻頭の序と最巻末の「てには用意の事」とを見ただけで言へるのであり、顧るべきは「てには綱引綱」の全貌である。

二ノ三 道敏の挙げた個々の手爾葉に関する論述は、軽重・緩急を以って一貫してゐるのが特徴である。左に抄出する。

○ては上を承けて下を起こす字也。詞の趣おもひによりて軽重緩急あ

り。生きてもよ……等の句の中間に有るは軽く 山もかすみて いかちぢりて と句の末にあるは重し。（上1オ）
○には こゝにかしこに とある事にかくある事に。といふ心也。軽重緩急あることは一首の趣によるべし。助字に於て等の字あればにと点をつくる也。於是軽く于は重し。歌は文字によらざれば詞のつゞけがらにて辨ふべし。句の中間にあるは軽き方なるべし。ての字の例にて知るべし。

古今 恋しきにわひてたましるまとひなは……

拾遺 八重むくら茂れる宿のさひしきに……

右 恋しきにのの字は重く急也。さびしきにのには軽く緩やかにして、しかも味はひあり。（同5ウー6オ）

○は強く物を断はる心有り。又、事をかぎりていふ字也。重く急なるてにはながら詞の趣によりて軽く緩やかに聞ゆるも有り。句の中間にあるも軽重あるべし。一首の趣意を察して分別すべし。（同10オ・ウ）

○……花のちりなん。などよめるは、花のちらんといふ義なり。至りて軽し。……又 とへかしな はかなしや などいふなの字、やの字もさして心なし。至りて軽し。（下4オ）

○つる つれ は ぬる ぬれ よりは重く強し。……つる つれ は緩急有るべし。……又と留るもつ字に大体おなじといへども、詞の趣によりて聊か軽重有べし。（同12ウ）

上巻は続く手爾葉、下巻は切れる手爾葉と二分したそれらの手爾葉の説明は、右に示した如く軽重・緩急であり、それを以てしない語はほとんどないと言つてもよいからである。然らば道敏の

言ふ軽重・緩急とは何なのか。「重く急」・「軽く緩やか」と随所に見え（「物を」・「は」・「まし」・「つる」等の条）、大体、重きが急、軽きが緩なのだが、その具体的説明はなく、一首の趣意を察して分別すべきなのであり、旧来、歌学の上で言ってきたのと同じである。（例へば『毎月抄』を例示すれば「歌の大事は詞の用捨にて候ふべし。詞につきて強弱大小候ふべし。それを能く見したためてつよき詞をば一向にこれをつづけ、よき詞をば又一向にこれをつらね……」の如くである。）ただ如上の諸例、またつるはぬるよりは重くましはべしよりは軽く緩やかとか、「花のちりなんなどよめるは花のちらんといふ義なり。至りて軽し」などあることから（「つる」・「まし」・「なん」の条）、それは手爾葉の意味ないしは感じであつて、今日の文法上のことではなく、従つてはつきりしたものは言へない。ただし(1)一首の中間にあるのは軽く、末にあるのは重く（「て」「とて」「して」「に」「を」・「とや」等の条）、(2)「思ひそめてし」・「消えにし。人を」の如く「既往のし」に続く・には「至りて軽く」、「思ひそめてし」は「思ひそめし」の心とあるのは、多少はつきりしたものと言へる（「てし」・「にし」の条）。しかし(1)も「句の中間にあるも軽重あるべし。一首の趣意を察して分別すべし」とあり（「は」の条。その他「を」・「して」の条など）、その「一首の趣意を察して分別す」ることが『てには綱引綱』の基本態度で「すべててには、活物なれば柱に膠して瑟を鼓すべからず」の比喩でも表現された。序で「てには、詞に随ひて様々になるべき事也。一首の体、一句の勢によりて意味分別あるべきを……」と言ひ、「てには用意の

『てには綱引綱』と『てにはをの辨』

事」で「……てには、詞につきてその義を覚悟する也。依りて同じてにはも毎首その心たがふ事有べし」と言ふのも同じことである。これらを総括して田辺正男は「……特に 詞 との関連に於いて一首の体勢、趣意の上からその意味を判別すべきことを力説したものである。言ひ換へれば、テニヲハの本質的性格を或程度まで認識し、その意味の理解に文脈の考察が必要だとして、いはゆる言の面を極めて重視したものにはかならない。」といふ。「テニヲハの本質的性格」・「文脈」の意味するところが先づ問はるべきだが、右の理解は略々妥当であらう。ただ、全く異なる立場に立つ近代言語学者の言ふ術語の使用は避けたい。

二ノ四 最巻末の「てには用意の事」において

てにはの義、教品あるやうなれども、所詮は切ると続くとの二つ也。文章に句読あるがごとし。句読を辨ふればその理よく明らか也。歌もてにはの切ると続くとのふたつにて、一首の道理はと、

のふべし（20才）

と述べたことは、既に山田孝雄・田辺正男・青木倫子等の指摘の如く重要な発言である。「てにはの義、教品あるやうなれども」は直接的には「手爾葉大概抄」に言ふところを指し、田辺正男の「テニヲハの本質的機能を、切るはたらきと続けるはたらきの二つに帰し、この二つの機能によつて一首の論理的な意味が成り立つ。つまりすぢが通るといふのだらう。切れ続きのことは、すでに手爾葉大概抄でも云ひ切る詞 とか云ひ切らざるテニハ とかいつて考へられ、連歌の書でも切字の名で議せられてきたが、綱引綱はこれをテニハの本質的機能として定着させたとくに重要な意義を

持つ」との論述は、「本質的機能」とは「本質的性格」とは異なることを認めた上で、私は全く同感である。さらに続けて田辺正男は言ふ。「ところで、かやうな見方は、一面に於いて

歌は詠吟のものなれば、詠みあげなどするになにとなく吟をうるはしく聞ゆるやうにと心掛くべし。吟をうるはしくせんは詞の続けがらによるべし。詞の続けがらは、てにはにあるべし。ただ一字も大切の事なり。古より秀逸たるは、その扱ひ、妙なるものあり。

といった和歌表現上の配慮につながつてゐるものやうである」と。

「ものゝやうである」といふ慎重な表現ながら、私は、道敏の言ふ切統を右の引用文と関連させる要はないと思ふ。道敏の拠るべしとした『八雲御抄』（巻六）に「いはゞよき詞もわろき詞もなし。たゞつゞけがらに善悪はあるなり」と見え（『毎月抄』にはほとんど同文でうけつがれる）、その続けがらに手爾葉が関与するためにその考察が為されてきたので、道敏の「詞の続けがらは、てにはにあるべし」との主張は重視すべきだが、やはり旧来の歌学の伝統に負ふものと考へられる。

次に今日なら活用表と呼ぶべきものを鈴木眼が「活語断統譜」と称し、用言の断と統とに注目したのは、道敏の切統の考へに暗示を受けたとの山田孝雄の指摘がある。暗示と言ふのだから敢へて異議を唱へるにも及ぶまいが、私には切統・断統といふ言葉の上の一致に捕はれてゐるかの感を持つ。暗示といふなら、言葉の上では見えない富士谷成章の装図をも指してよいのではないか。成章も眼と同

じく用言の断統に着目して活用図を作つたのであり、一は断統の語を表に出し、一は出さなかつただけだと思ふ。私は外面の一致だけでなく、内面の一致をも重視したい。

道敏の言ふ切統はもちろん手爾葉に関してであり、具体的に言へば、て・に・を等は続き、けり・めり・哉等は切れるといふのである。即ち語本来が続くか切れるかであつて、用言の場合の、一語の切れ続きではない。また用言の研究史を見ると、手爾葉研究に負ふことも忘れてはならない。手爾葉研究が進み、その承接を考へるやうになつて、上に来る詞が体言でなく用言の時には必ず一定の形につくといふ事実から活用形の発見となり、それが整備されてゆく。

本居宣長は違つた形に目を向け断統からの考察に欠けた憾みがあるが、朗・成章は手爾葉との接続から見事な活用表を作りあげた。成章は「あゆひ抄」において例へば「何よ何は名・單・脚の引引跡也」(巻一七才)の如く、必ず上に来る語を明示し、かつそれが用言である時は活用形を記した。手爾葉研究書である「あゆひ抄」巻頭に置かれた装図は、成章の手爾葉研究から導かれたと見るべきであらう。朗には単独の手爾葉研究書は存しないが『言語四種論』において論じ、「活語断統譜」に例へば「鮎く」の一等〔注―今日の終止形〕に「本語ニテトマル、トニツマク、キル、ヤニツマク、カシニツマク」(神宮文庫本。柳園叢書本は異なる点あり)と、用言を主体にした表現は、活用表の性質上さうなのであり、べしに続くものを第三等として七つの活用形を立てたのは理論上は正しく、この処置にはやはり手爾葉の承接関係の考究が先行しよう。即ち第三等を認めるためには「と・や」「および」「べし・らし」がいかなる語のいかなる形に続く

か、具体的に言へば、「散ると一散るらし。ありと一あるらし」といふ事実を知らねばならない。そしてそのことは「と・や」・「べし・らし」に限らず、他のすべての手爾葉の場合も同断であらう。つまり手爾葉研究書を作りその巻頭に活用表を出した成章ほど分りよくはないが、その成果から見て、朗においても手爾葉の承接の考察から用言の断続へと至ったのであり、「活語断続譜」の成立には「てには網引綱」の先行を必要としない。

次に以上と違った理解から切統に注意したのが青木伶子である。即ち切統といふ職能を以って二分したことが「紐鏡」や「詞の玉緒」の組織に大きな影響を与へたのではないかと考へてである。しかしながら宣長の係り結び研究の骨子は「本末かなへあはず」ことであり、それは旧來の秘伝書に言ふ「かかへ」・「おさへ」を発展させたものであった。

二ノ五 「てには網引綱」の目次ならびに本文標題に

けり ける けれ なり なる なれ
めり める めれ たり たる たれ

の如く記すを以て夙く花岡安見著「国語学研究史」（明治三五年刊）に「本居翁の係結三転説も之等よりや出でけむ」と述べ、山田孝雄・古田東朔も消極的ながら両者の關係を認める。（山田孝雄はさらに「てには網引綱」が宣長の蔵書目録にあり、かつ本居蔵印のものを入力したことを傍証とする。）亀田次郎は道敏の考へを一步進めれば宣長の研究に至るとまで言ひ（『日本文学大辞典』）、逆に青木伶子は「係り結びを認識していた旧説が没却された」とする。以下、少し道敏の言ふところを聴いてみたい。

「てには網引綱」と「てにはをの辨」

下巻「けり」の条に「けりは結語の辭也。強き辭也。けるは緩急あり。ぞといへばけるとおさゆるはつまりて急也。こそといへばけれといふはとまらざる意にして緩なり。助字に焉矣の二字、緩急あるがごとし」（一オ）とあるが、これを上巻の「ぞ」ならびに「こそ」の条を併せ見ればさらに明らかになる。「ぞ」の条では驚ぞなく、涙ぞ袖に玉は為す。けふよりぞまつ。袖ぞかはかぬ……等、「春樹頭秘抄」がぞに対して五音第三の音でおさへるとした例を挙げて「かくのごとくおさゆる事、常の事也」（上12オ）と言ひ、「又庭をぞ見まし。君ぞつかへむ。ふもとを見てぞかへりにし。春ぞすくなき等、その様、定めがたし（同上）と、五音第三の音でおさへない例を示して「ぞは強くをすてにはなるが故に、おさへの字も治定の字ならでは義理相叶はざる也。しかるに五音第三音を以ておさゆるを秘説などいふ事は僻事なるべし。ぞといひはなしておさへのなき歌、又あげてかぞふべからず。所詮、一首の体によるべし」（同上）と述べる。即ち所謂係り結びの如き法則があるのでなくて、その呼応は一首の体によるものとした。そのことは「こそ」の条でも同様で

こそはぞと大体同じ。但しぞは急にしてこそは緩し。故にぞといへばけるとおさへ、こそといへばけれとおさゆる歌多し。けるは急にすればは緩やかなる也。是をのづからしかなるべし。然れどもぞける、こそけれなど一定すべからず。一首の体によるべき事也。所詮、義理の正しきを以てよしとす。てには相応ぜざればことわり聞ゆべからず。……有とこそきけ。君をこそまで……かくの如くおさゆる事、常のこと也。……こそはぞの字

よりは緩ゆるきてにはなれば ぎけ おもへ 見め などやうにおさへことばの辞も緩ゆるし。自然に相応する辞也。しかるに五音第四音を以ておさゆるを秘説などいへるは例の僻事也。こそといひておさへの字なき歌、又あげてかぞふべからず。……こそといはんは物をさしあてとがめなどするやうの心に用ゆべし。さすれば自然と五音第四音にあたる事の有るべき也。それを秘伝などいはん人は却つてあさはかなる事也(上14オー15ウ)

と述べ、常に上にぞが来れば今日の文法論で言ふ連体形、こそが来れば已然形で結ぶといふ如き、はつきりした法則を認めてゐるのではない。ぞが来て五音第三の音で結ばない例、また下におさへのない例も多く、それは一首の体によつて、ぞ↓ける・こそ↓けれと相応するのは辞ことばの緩急の相応で、ぞ・けるは急、こそ・けれは緩であるから相応するといふのである。即ちただ外形からだけ見れば、「けり ける けれ」の三体は宣長の挙げた三形と同様だが、その本質は宣長の係り結び研究とは異質のものである。またぬ・つはそれ↓ぬる・つるの略としてゐるのを見ても、宣長への影響を考へる説はいかがであらう。嘗つて「係り結び研究史稿」で述べた如く、宣長の研究は道敏の難じた『手爾波大概抄』・『春樹頭秘抄』等を濫觴とし、その間に「てには綱引綱」を置くことは当を得ないと思ふ。むしろ「係り結びを認識していた旧説が没却されたのは惜しむべきこと」との青木恰子の見解の方を是としたいが、ただ「没却」といふことが道敏を係り結び研究史から抹殺する意味なら賛成したい。私は一首の呼応を自然の理―一首の体、ことばの緩急といふ、外形以外に眼を向けた点に別箇の位置を認めたい。右旧稿を

結ぶに当り、宣長のいふ第一転の問題を解決するために「係りとは何ぞやとその本質が追求されなければならず、それは山田博士の出現を待たなければならなかったが、古くこの方面の先駆者として私は梅井道敏・牛尾養庵の二人を挙げることができると思ふ。但し先駆者と云つても、その議論がまだ実質を伴はないと評すべきものであるが」と記した所以である。

二ノ六 以上、述べたところからして結局「てには綱引綱」は、一首の歌の意味ないしは味はひの理解が眼目であり、そこに手爾葉を重視して説明が為され、また時代の推移は秘説伝授を排撃することになつたのである。その批判が面的なことは従来指摘の如くであり、手爾葉研究史の上から重視すべきだが、所説の実質は旧来の歌学の伝統をほとんど出なかつたと言へる。山田孝雄が旧派の人といふのも尤もである。「春樹頭秘抄」などに「いひながして余情あるて」の例証として「しらくもかかる山となるまで」の歌を挙げたのを道敏は非難し、「この義いかゞ。までは詞にてて。留りの例にあらず」(「して」の条)としながら、「しを」の条で古今集の「思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを」などを「結句の末にしをといへる……いひ残すてには也」(上8ウ)と、自ら難じたと同じ誤りを冒し(ただし下巻に「まし」を一語と認めてゐる)、「春樹頭秘抄」などにおいて「我恋のあらはにもゆる物ならば都の富士といはれなましを」などを例歌とした「しを」と云ふ手似於葉、凡そ句の終りにしを。と云ふは、おほくいひのこす事あるべし」(「姉小路式」・「春樹頭秘抄」ともに第二巻、「春樹頭秘抄」第六巻)の説明と一致してゐる。所詮、烏丸光栄を師と

した道敏は旧来の歌学の伝統から脱しきれる人ではなかった。

ちなみに野中春水の厚意により披見し得た玉田永教著「百人一首夷曇」は、手爾葉の記述において「てには網引綱」を直接に参考にしたものである。(野中春水「百人一首夷曇考」昭和四十六年刊・神戸大学教養部人文学会論集10)尚「国書総目録」によると、写本の「てには網引綱」が三ヶ所に存するが、これらが板本の写しなのか、あるいは稿本なのかは全く未調査である。もし稿本の類ならば別に論ずることも出て来よう。手許にある天明二年写本(板行後一二年に当る)は全く刊本と同一内容ながら内題に「出似葉抄」、外題に「出似葉乃記」とある。

三 蜘蛛のすがき 付、詞のあきくさ

三ノ一 甲乙の二巻二冊。安永九年(一七八〇)八月の自序から見て同年成る。翌十年刊。

甲巻は「てには網引綱」に言ひ残したことを、乙巻ではあらたに虚字のことを記した。甲巻では「てには網引綱」の次第に従ひ、執筆の態度は前述と同じく、所説に別に発展はない。乙巻の虚字とは、前著において手爾葉と混すべきでないとした「ただ」・「なほ」・「いとど」の類にとどまらず、「又・かつ……、これ・その……、ごと・よし……、折・程……」など約五十条・八十語を挙げ、古今集以下を例として主としてその意味を記した。巻頭の「虚字の事」で「……漢家の文字のまゝに心得侍りて大方違ふ事なしと見ゆれど、和歌には猶一首の趣によりて同じ文字も義理たがふ事有るべし。それを心得るが肝要也」と前著と同じ態度を持し「唯は字書に

「てには網引綱」と「てにをはの辨」

専字也と注せり。歌によりて軽重あり。唯たのため」と詞の上に有るは重く、たのため唯。とあるは軽し」(一オ・ウ)とやはり軽重を以って「猶・早・此・是・いかに」等を説く。中にその師、烏丸光采の説が見える。

この、虚字・実字といふ漢文の用語を借りて説いたものに夙く室町時代に一条兼良の「歌林良材集」(刊行は寛永二〇年)、後には加藤景範の「和歌虚詞考」(寛政元年刊)がある。私は嘗つて副詞の研究史を素描した際(「副詞と連体詞」―「続日本文法講座」1、昭和三十三年刊)、「蜘蛛のすがき」を敢へて省いた理由を稿末に注したが、今もその考へは変わらない。しかし、始めてこの類を手爾葉より分離し、多くの語を集め独立した一巻として考察したことは偉とすべきであらう。

三ノ二 「詞のあきくさ」は「てには網引綱」と「蜘蛛のすがき」とを併せたもので、文化十一年(一八一四)四月刊。四巻三冊。第一冊(上)は「てには網引綱」上巻、第二冊(中)は同下巻と「蜘蛛のすがき」甲巻、第三冊(下)は同乙巻である。両書合冊のため、「てには網引綱」の序文に代へて「蜘蛛のすがき」の序文を第一冊の巻頭に掲げ、また「てには網引綱」・「蜘蛛のすがき」の標題を「詞のあきくさ」と改刻するなど、必要な変改が見られる。

四 てにをはの辨

四ノ一 上下の二巻二冊。写本で伝はり文化七年(一八一〇)・同十年・同十三年書写の三本がある。道敏の門人、幻交庵なる人の編著だが、伝は未詳。成立の時期は序に年時を記さず、明らかではない

いが、序の書き出しに「先に和歌の大意を書記し、初学和歌を詠すべきの心持・習練の次第を巨細に申述べて、猶虚字の詠格をあげて、詞のあつかひを覚悟すべき便りとす」(後述の富田本による。傍点筆者)とあるから「蜘蛛のすがき」の成った安永九年以後であり、さらに「予も壮年の比、此の書〔注一〕てには網引綱を指す」を構ぜられし其の席に三度逢ひぬ(富田本)との口吻は、この時、既に道敏は歿してゐたかと思はれ、さすれば道敏の死(天明五年)から富田本の成った文化七年までの二十五年間に成立といふことになる。以下、私の見た国会図書館・亀田次郎旧藏本(亀田本と呼ぶ)と富田大同所藏本(富田本と呼ぶ)との二本に就いて述べる。未見の学習院大学所藏本はその奥書に「文化十三曆^子夏六月 幻交庵 花押」とある由だから、福井久藏旧藏本の可能性が濃い。

亀田・富田両本とも内題「てにをのはの辨」、ともに総丁数は上巻六十六枚、下巻七十二枚、上巻一丁〇九丁〇が序、九丁〇終行一十一丁〇が目次(十二丁〇に目次のうち九も常に覚悟すべき事)として「さへ」・「だに」等十四語再出、十二丁〇一六十六丁〇が本文、六十六丁〇が白紙、下巻一丁〇一七十一丁〇が本文、七十二丁〇が白紙、七十二丁〇が奥書である。序・本文は一面九行に記し、外題・内題・序・目次・本文・奥書を通して一筆であるばかりでなく、実は亀田本と富田本とは全く同一人の筆跡である。後記奥書の内容から見ても、また奥書・自署・花押を後筆と疑ふことはできないから、亀田本・富田本ともに編著者・幻交庵の自筆本と考へてよい。

奥書は伝授の際の誓詞で、筆写年時が即ち伝授の年時であり、被

伝授者が異なるから両本の奥書に小異があるのは当然だが、今、亀田本を以て示す。

這亭爾遠波乃辨二冊者雖為歌道奧秘極伝之大事年来依執心所望今般吉田利茂主^被令附屬畢如誓約堅不可有他見口外可為秘藏者也

文化第十曆^酉仲冬 幻交庵 花押

(富田本は文化七年^午八月に玄路和尚に伝授とある。)

即ち幻交庵が自ら全巻を書写して、一は文化七年に玄路和尚へ、一は同十年に吉田利茂へ伝授したのであり、福井久藏旧藏本が文化十三年、学習院大学藏本も文化十三年の奥書がある由だから、幻交庵は三度か四度にわたって伝授したことを知る。(福井久藏の言ふ文化十三年は著作年代でなく伝授の年に改めなければならぬ。)

学習院大学藏本もおそらく幻交庵の自筆であらうと予想するから、幻交庵なる人は「てには網引綱」・「蜘蛛のすがき」が板行後でありながら、猶、全巻を自ら書写した上で伝授するといふやうな、非常に伝授を重んじた人であつたと思はれる。(大部の書では本文は他人に書写させ、誓詞のみ奥に自書する例は散見する。一例を挙げれば「春樹頭秘増抄」において、東京大学藏本・亀田次郎旧藏本〔悉〕・架藏本のそれ〴〵が奥書のみ長収か長因の自筆、あるいは長収・長因の自筆連書、さらに自署・押印がある。)

尚、上巻49オの前半と後半とが亀田・富田両本間に入れ違つてゐるが、これは前からの続きから見て富田本が正しい。

四ノ二「てにをのはの辨」(以下、本書と記す)は「てには網引綱」

(以下、原著と記す)の増補であり「蜘蛛のすがき」とは全く関係はない。全巻の組織は原著と略々同じだが若干の差が見える。即ち

(1)原著の上巻終りの方の「さへ」だに「かや」の四条を本書では下巻の始めに移したこと、

(2)原著の「は」の条の「ては」・「ぞ」の条の「てぞ」・「も」の条の「ても」を本書では「て」の条に、「は」の条の「には」・「ぞ」の条の「にぞ」・「も」の条の「にも」・「や」の条の「にや」を「に」の条に、「ぞ」の条の「をぞ」・「や」の条の「をや」を「を」の条に、それごとく移したこと、

(3)原著最巻末の「てには用意の事」を廢したごと

などである。(1)の結果は道敏の意図した、上巻は続く手爾葉、下巻は切れる手爾葉といふ構成が崩れる不体裁となった。本書は道敏著と呼んでもよいほど道敏の意を体しながら、かかる変政を取へて為したのは分量を考へての便宜の処置であらう。即ち原著の如く「さへ」だに「やか」までを上巻とすると、上巻が94丁、下巻が44丁となり、余りにも均衡を失するからである。(2)は掲出しただけの語なら、連語の上位語による統一だが、実は「ぞ」の条で言へば、「てぞ」・「にぞ」・「をぞ」はそれごとく右記の如く移されながら、「はぞ」・「とぞ」・「もぞ」はもとの「ぞ」の条に置かれてゐる。一見、不統一に見えるが、これは師・道敏の軽重・緩急の見を連語に及ぼし、その強い方を以て項目としたため、例へば「て」の条で「ても」は「て」字は急にしても「字は緩き字」、「ては」多くて「字は重く、は」字は軽きかた也」と見えるので明らかである。即ち「てぞ」・「にぞ」・「をぞ」は「て」・「に」・「を」が「ぞ」よりも重いから「ぞ」の条からそれごとくの条に分属せしめ、「はぞ」・「とぞ」・「もぞ」では「は」・「と」・「も」が「ぞ」

「てには總引綱」と「てにをはの辨」

よりは軽いから、重い「ぞ」の条に置いたわけであり、道敏の考へを連語にまで広めたと言へる。(3)は道敏が特に重視した事項を最後に一括したのだから、それなりに意味はあるが、中には本論で説くべきもの、また序と重なるものもあり、もと／＼原著の序は序説とでも言ふべき内容だから、両者を統合敷延した形の本書の方がすっきりした感を与へる。

四ノ三 本書の本文は原著をすべて吸収しながらの増補で、あらたに設けた項目もある。原著で別に子細がないから証歌は略すとしたもので、「ては・には」(「は」の条)、「てぞ・にぞ・をぞ・はぞ・とぞ」(「ぞ」の条)、「ても・にも・をも・さへも・だにも」(「も」の条)、「さへは・さへに・さへや」(「さへ」の条)、「てや・にや・をや・もや」(「や」の条。尚、原著では右のうち「ては・には・にも」を除く十六項目は目次には掲げる)と何れも連語で、証歌を挙げて相当詳しく説明する。然らばこれら増補の部分がすべて幻交庵の意見かと言へば、おそらくはさうでなく、序に言ふ三たび道敏の講筵に列した折の聞き書きの類が主で、それに一部幻交庵の考へもあらうが、それは全く師説の線上にあり特に幻交庵説と言つたものを取出すことは困難である。それほどによく纏つてゐるのである。原著にはあまり見えない判詞が多く加へられたのは本書の特徴で、俊成判が最も多くて十を数へ、他に定家・蓮経・後鳥羽院・為家・忠良等の名が見える。もしこの部分が幻交庵自身の増補なら、そこから彼の考へを引出すことができるわけだが、これも聞き書きかもしれない。序では日野資枝の聞き書きをも集めたところ、本文に名は見えず、資枝説は知り難い。

要するに本書は実質的には幻交庵著といふより道敏著「てには網引綱」の増訂版とも言ふべく（私が幻交庵著とせず編著と称してきた所以である）、原著を読む上の参考書と言ふよりは、むしろ原著を捨てて本書についての方がよいと言へる。他人による増補が全体の調和を破る例は間々あるが、本書は原著をすべて吸収しての増補を試みながら、全く破綻を見せてゐない。手爾葉研究史上、原著に与へられた評価は、そのまま本書への評価である。

注(1)私は昭和三六・三七年にそれまでに刊行の国語学史を挙げて簡単な批評を下したが（「福井久蔵博士と国語学史」―神戸大学国語国文学会編「国文論叢」5号、「係り結び研究史稿」の「註一」―神戸大学文学部編「研究」26号）、以後の刊本には永山勇「国語意識史の研究」（昭和三八年）、三木幸信・福永静哉「国語学史」（同四二年）、古田東朔・築島裕「国語学史」（同四七年）、北島正年「国語学史概説」（同五一年）等がある。

(2)「てには網引綱」に全く触れないのは長連恒「日本語学史」（明治四一年）、橘文七「国語学史要」（大正一五年）、時枝誠記「国語学史」（昭和七年ならびに一五年）等である。ただし時枝誠記は学書を網羅する意志は全くなく「私は、只一途に、雑然たる広野に、一の大路を切り開くことを試みた」（昭和七年版の「はしがき」付記）と、その態度を明らかにした。この文辞は十五年版には除かれたが、執筆の態度は同様である。

(3)これを直ちに助詞・助動詞の別と見るから、下巻に「かし・

つつ・哉」を入れたのを不当と見るやうになる。すべて過去の研究に対する批判は現代の眼を以つて軽々しく行ふべきでない。

(4)この傍証に就いては尾崎知光に発言があり、同時に「てには網引綱」の先蹤問題に触れる。（「てにはをは紐鏡」の成立と学説」愛知県立大学文学部論集、四九年）

(5)戦後間もないほどの福井久蔵よりの私信に「……私もその四月十一日には御進講の榮を蒙りその廿三日に全焼自分のものは数万冊烏有に帰せしも人様のもも飯島博士の千冊、東条操氏の二千冊以内悉く烏有に帰せしめて……」とあるが、その後はからずも古書目録により入手したものにその旧蔵書があり、なかに自写の一本を見出して深い感懐を覚えた。「てにはをはの辨」も戦禍を免れたかもしれない。

（付記）1 原文の引用には次の加除を行った。

加―句読点・濁点、漢字の送り仮名と訓み

除―分りきった漢字の訓み、ならびに活字に移しがたい符号

2 生歿を問はず、敬語表現はすべて廃した。

3 「てにはをはの辨」の所蔵者・富田大同の厚情に対し、深甚な謝意を表する。

（一九七九・九・二八）